

憑くことと祓うこと 安田百合絵

・煮えたぎる鍋を見すえて 大丈夫 これは永遠でないほうの火

井上法子『永遠でないほうの火』

井上法子歌集『永遠でないほうの火』については昨年九月号の時評でも言及したが、詩人の田中庸介は「詩客」短歌時評において、ここで引用した歌を原発の歌として解釈している。

もし「永遠でないほうの火」が台所の煮炊きの火なら、それでは「永遠の火」とはなんだろうかと考えてしまうが、シンプルに考えてこれは「プロメテウスの火」すなわち原子力である。

(田中庸介「詩客 短歌時評」)

こうした解釈は決して田中独自のものではなく、一般的に共有されている読みであるらしい。個人的には、この火の対極にある「永遠の火」は、原発の火というよりむしろ此岸(こゝろ)の外の、ゲヘナすなわち地獄の劫火のように思える。この世ならぬものを束の間幻視し、「大丈夫」と確認しながら現実に戻ってゆく感覚が、煮えたぎる鍋を媒介して描かれているのではないか。

しかし、筆者の個人的な解釈は描いてここで注目したいのは、井上が「震災・原発読み」に戸惑っているように見えることだ。「福島民友」のインタビュで井上は「東日本大震災の歌とは読まれたくないが」と言明し、今年の一月に「福島民報」に掲載された対談でも「私はそれら(＝震災・原発)をテーマに詩や短

歌を書いたことがあります」と述べている。この宣言が興味深いのは、井上は同時に生身の作者の来歴をあたら限りにじませずに詠うことをめざしてきた歌人でもあるからだ。『永遠でないほうの火』のエピグラフにはブランシヨ『来るべき書物』の一節が引用され、そこで示されている「非人称的に語る」ということが井上にとつての理想だという。ユリイカの記事「現代短歌とフランス文学」のなかで吉田隼人は「作品から作者を切り離して、いわば〈私〉の悪魔祓いを試みる」(傍点筆者)と井上のスタンスを極めて的確に要約していた。

たしかに震災・原発読みを避け、あるいは拒否することは、歌と作者を分離し私性を払拭するのに、好適かつ必要な手段だろう。ただ、ここにはアイロニカルな逆説があるように思えてならない。それは「作品から作者を切り離し」「非人称的に語」って「〈私〉の悪魔祓い」をするために、作者の存在が前面に登場して「震災の歌とは読まれたくない」「震災をテーマにしたことはない」と繰り返して主張しなければならぬ、というパラドクスである。

「白いエクリチュール」であるために、作者みずからが、時には読み手に抗って私的なコンテクストからの脱却を図らねばならない——これは、短歌という私性の呪縛の強い詩型から〈私〉を解放せんとする挑戦者たちが負う、悲劇的な宿命にほかならない。井上自身明瞭に意識しているだろうが、もとより震災を詠んだことがない、という言明は不可能だとも言える。無意識は制御しえないし、拒否するという仕種が雄弁に物語るように、憑かれなければ〈祓う〉こともできないのだ。読みと詠みのせめぎあいを垣間見せて飽きさせない一首である。